

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(4)

坂 本 清 音 監訳
檜 本 尚 美
矢 吹 世紀代
小 島 紀 子
柿 本 真 代
吉 岡 弘 子
松 波 満 江
阪 上 敦 子
小 林 弘 美
杉 野 マリ子
秋 山 恭 子

〈クラーク書簡 C-11〉【檜本尚美 訳】

1891年12月 3 日

拝啓 デントン様

長期にわたり忍耐強くホワイトさん¹の看病をして下さり、それが間違ひなくあなたの健康に影響を及ぼしたこと、またご親切にも「まさかのときの友」²の付き添いでカリフォルニアに帰って来られたことを知っても驚きませせんよ。事情が分かれば分かるほど、あなたが一時期—おそらく3ヶ月か6ヶ月—カリフォルニアに留まって休息されることがどれほど適切かを確認しま

すし、あなたがそうして下さることを願っています。

この手紙が、もしまだアメリカ滞在中に届いたならば、是非ご連絡ください。そうでないとしたら、できるだけ心配事から解放されるように京都から離れて、まとまった休みをとってください。

この書簡をジュエット夫人³気付でお送りし、夫人からあなたに転送していただきます。

敬具

N. G. クラーク

メアリー F. デントン様

H. E. ジュエット夫人気付

カリフォルニア州ヴァカヴィル市⁴

*全体を通して、注記中に「前出」や「参考」の後の書簡番号に、[100]と〈100〉の区別がある。前者は書簡全体を意味し、後者は書簡中の該当する注を指す。

1. White, Florence (1845-1931) マサチューセッツ州アマーストン生れ。アメリカの女子教育機関で長年教師を経験したのち1888年来日。9月同志社女学校の「校長」に就任。女学校の教育の高等化、生徒のキリスト教教育に成果を挙げたが、1891年に強度のインフルエンザにかかり、手足に麻痺を残して1891年7月には帰国せざるを得なかった。
2. 'a friend in need' 「まさかのときの友」とは、たまたまこの時期来日していたミス・デントンの従弟のこと。彼の兄がアメリカで亡くなったとの報が入り、急いで帰国することになったが、一人旅は困難だった従弟にデントンが付き添った。1891年10月6日から11月22日まで僅か47日の旅程であり、文字通りのとんぼ返りであった。当時、太平洋の航路は片道3週間程度かかることから、カリフォルニア滞在は1週間もなかった。
3. Mrs. H. E. Jewett 太平洋ウーマンズ・ボードの第4代会長（在任1890-1899）。第3代会長 Miss Lucy Fay の時代は、同会の幹部を務めた。なお1877年以来、毎週 *the pacific* にボードの記事を寄稿していた。

4. Vacaville ヴァカヴィル市。カリフォルニア州中部にある州都サクラメントの西南西にある。

〈デントン書簡143〉【矢吹世紀代 訳】

日本 京都

1892年 2月29日

拝啓 クラーク博士

ヴァカヴィル市から転送されてきたあなた様の自筆の¹手紙を受け取り、大変感銘を受けております。その他、日頃のご厚情に対しても感謝の気持ちでいっぱいです。日本へ戻れば²、[校長職の]ポストと仕事が待っていると思っていたのですが、女学校へ着いて2時間もしない内に、それは間違いであるとわかりました。現在健康面は全く問題ありません。昨年の夏は確かに疲れきっていましたが、それはホワイト校長の看病のせいではありません。彼女の看病は私にとっては苦ではなく、むしろ名誉だったのです。不運だったのは、[私が女学校で自分が置かれている]状況³をもっと早く理解していなかったことなのです。

それにしても悲しい！これは実に悲しいことです！男性というものは自分のことを過大評価しがちですが、立場の弱い女性であっても、たまには自分を価値あるものと思っても許されるのではないのでしょうか。たとえ他の人たちから邪魔者扱いされていたとしても、です。私の場合、さらに残念なことに海の向こうの母国には、良き理解者がいて、一緒にいることを幸せに思い、私が不幸になれば極端に悲しむ友だちがいるのです。

このことに関しては心配ご無用です。あなた様が私のことを可哀想に思っただけの下さっているだけでは助けになりません。可能な限り早く、私は毎日味わう惨めな思いから抜け出すようにします。

私のことは誰の手紙にも書かないでいただきたいのです。時が解決してくれるでしょう。神のお導きを信ずる信仰を私が全く失ったわけではありません

んし、そのお導きはこれまで何よりも確かなものでした。今、私がここ京都にいるのも神のお導きがあつてこそと、なおも信じて疑いません。あなた様がいつも差し伸べて下さる助けの手に神様の恵みがありますように。

長々と書きましたが、これをご無沙汰の言い訳とさせて下さい。いっそご無沙汰のままの方が良かったと私たちは二人共願っていることでしょうね。

敬具

メアリー・フローラ・デントン

1. クラーク書簡は通常、彼の口述文を秘書がタイプ打ちする形であった。その上、この当時クラークは病気のため、視力をほとんど失っていたにもかかわらず、全文手書きであったことにデントンは感激した。
2. デントンは従兄が亡くなって1891年10月6日から11月22日まで一時帰国していた。
3. この時期、デントンは女学校に戻れば、「校長」職が待っていると信じて早々にアメリカから帰国したが、状況は異なっていた。そのことに、デントンは心を乱し、周囲を大いに混乱させた。詳しくは、拙論「ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで」(『同志社談叢』35、2016) 参照。

〈クラーク書簡 C-12〉【小島紀子 訳】

1892年3月5日

拝啓 デントン様

ホワイトさん¹がこの国(アメリカ)におられないので、マサチューセッツ州レスターのH. A. ホワイト夫人²が送って下さった、フローレンス・ホワイトさんの仕事のための10ドルの寄付金があったことをご報告しておきます。

以前にホワイトさんがなさっていた仕事を一番よくご存じのあなたには、その用途がお分りのことでしょう。

敬具

N. G. クラーク

1. ホワイトは1891年7月16日帰国後、1年間休養しメキシコへ。1892年7月26日正式にメキシコのミッションに転属し、その後1895年にボードから脱退する。前出〈C-11〉
2. ホワイトのゆかりの人が、詳細は不明。

〈デントン書簡144〉【柿本真代 訳】

1892年

拝啓 クラーク博士

はじめに今、耳にしたばかりのことをお伝えします。どうやらホワイトさんは、当地の宣教師の中には、彼女が復帰するのを快く思わない者がいると言われたようなのです。どういう意味か私にはわかりかねますが、私としてはホワイトさんのことがとても好きですし、彼女の才能や能力を心から尊敬していますので、喜んで彼女の復帰を受け入れたいと思っています。

私の発言に影響力はありませんし、将来的にもそうでしょうが、私はホワイトさんの味方であるということを表明しておきたいのです。

この仕事に従事する中で、そして自分は神に導かれたと言い張るクリスチャン仲間のせいで、あまりにも多くの人が心に傷を負いました。ホワイトさんもまたその被害者だとすれば、本当にお気の毒です。

ホワイトさんは適合性や能力、経験などについては、平均よりずっと優れていますし、もし彼女がもう少し手を抜いていれば—実際（解読できず）…、健康上の問題など起こらなかったでしょう。

〈クラーク書簡 C-13〉【矢吹世紀代 訳】

〔デントン書簡 [143] への返信〕

1892年 3月31日

拝啓 デントン様

2月29日付のお手紙を今朝受け取り、驚きと同時に途方にくれております。あなたご自身や、共に働いている方たちとの関係については、好意的な評判

以外一切の報告は受けていません。私はいつもあなたのお手紙を高く評価して来ましたし、仕事ぶりに関しては最高だとみなしています。が、この度の手紙の内容については全く理解しがたいです。もし京都の女学校関係者とうまく折り合いが付かないのであれば、日本中には、必ずあなたを快く受け入れてくれる場所はいくらでもあります。休暇から早く戻りすぎてしまいましたね。できればカリフォルニアでもう数カ月ゆっくり休んで欲しかったのですが、今のような疲労困憊の状態では冷静に判断出来ないだろうと言わざるをえません。かなり長い間、疲れを感じることもなく仕事に精を出しておられたのは分かっていたから、あなたが倒れてしまわないかと少なからず心配していたのです。多分、長期にわたって休まず働いてこられたために、もう神経が参ってしまっていると思わざるを得ません。

日本でしっかりと休暇を取れる場所が見つかるかもしれませんが、ないなら、カリフォルニアへ戻って必要な休息をお取りになるのがいいでしょう。すぐに思い着くのは、前橋に行かれると気候風土の変化が気分転換にいいかもしれないとか、北海道に友人や知り合いがおられるなら、そこで数カ月間完全休養されて、心機一転して仕事に戻られるという案なのですが…

デントンさん、私にはあなたが辞職するなんてことは考えられませんし、周りの人との関係で、あなたが不自由な思いをされたり、試練を受けておられる状態も考えられません。状況は改善されなければなりません。あなたには安心して思いの丈を話せて、必要なアドバイスや手助けをしてくれる友人が京都には居られるはずです。どうか1日も早く心を打ち明けてご自身を取り戻され、喜びと笑顔にあふれて働けるようになってください。私は以上のことを、主のために、そしてあなたが素晴らしい仕事をしてきた日本の女性のために祈っています。

敬具

N. G. クラーク

追伸：ホワイトさんに関してですが、あなたの寛大なお言葉¹を心に留めて

おきます。日本の他の女性宣教師たちから、彼女が日本に戻ることに反対の意見は何も聞いていません。ただ健康上の理由なのです。病で長期間苦しんで「ブレイク・ダウン」してしまった人が元の職場に戻って働くことはほぼあり得ませんし、宣教師法則にも反しています。それはただ、当事者の宣教師を古傷に晒す²ことになりすし、また看病を余儀なくされる周りの人をも困惑させることになりす。それだけのことです。私はホワイトさんを尊敬していますし、また他の場所で新たな活躍の場を見つけて、宣教師の仕事に喜びを見出してくれるよう祈っています。C.

1. デントン書簡 [144] 参照。
2. ホワイト「校長」が前年2月、強度のインフルエンザにかかった折に、おぞましい程のヒステリー症状が露わに出たこと。デントン書簡 [141] 参照。

〈クラーク書簡 C-14〉【吉岡弘子 訳】

1892年6月20日

拝啓 デントン様

あなたのお仕事のためにと20ドルを寄付して下さった方がいらっしゃいます。マサチューセッツ州の方ですが、それが誰なのか、あなたにはお分かりでしょう。私からは、上述の額が‘マサチューセッツの友人’と裏書きされて報告書の中に入っていたとしかお知らせできません。

敬具

N. G. クラーク

追伸：最近耳にしたのですが、昨年厳しい試練¹を体験した後に京都の学校の仕事に復帰されたあなたには、少なくとも一年間の休息と気分転換が緊急に必要なだと気遣われているそうですね。私の手紙が、カリフォルニア滞在中のあなたに届かず引き止められなかったことが、返す返すも残念です。伝道活動の現場において、あなたの仕事ぶりは全ての人から高く評価されていま

す。だからこそ仕事の再開に向けて、今ここで健康回復のため休暇を取るべきだというのが誰もの考えです。どうか、そのために1年間の長期休暇を取るために運営委員会にしかるべき手続きを取ってください。そうすれば、休暇中の出費が保障されますから。C.

1. ホワイト「校長」の看病のこと。デントン書簡 [141] 参照。

〈クラーク書簡 C-15〉【松波満江 訳】

1892年11月5日

拝啓 デントン様

ご健康を取り戻され、これからも続けようと考えて、女学校の仕事に復帰されたことを人づてに知りました。長期休暇も取られずにいたので、そこまでは望んではいみませんでした、あなたの働きを高く評価していればこそ、女学校はどうなるだろうかと少なからぬ不安を感じていました。

あなたとマイヤーさん¹という善良で熱心で意志が強く、独自の考えを持って仕事に取り組むことのできるお二人がいらっしゃれば、当然、学校はうまく行くものと期待しておりました。あなた方お二人はとても違うというまぎれもない事実があるのですから、些細なことは見解の相違だと割りきることが出来れば、お二人の力はプラスとなるのです。キリスト教的な目的があれば、仕事をうまく運ぶためには、個人的な見解は喜んで二の次にしてくださいと確信しています。このような提案をすることさえも必要かどうかわかりませんが、もし必要でなければ、あなたのことが心配で、私に関心を持ち過ぎた余りと思って大目にみてください。

マサチューセッツ州ミルバリー在住のミー夫人²から、海外伝道に関心のあった2人の少年の記念にと5ドル*の献金があったことをご報告したいと思います。

敬具

N. G. クラーク

※パスマライ神学校³の生徒用コテージのために。

1. Meyer, Mathilde H. (1852-1927) 米国ウィスコンシン州出身。1887年来日、仙台ステーションに所属し、東華学校（男子校）で英語とドイツ語を教える。日本ミSSIONの決定で、本人及び仙台ステーションの意に反して、1891年同志社女学校の「校長」に就任。2年後、1893年に帰国。
2. Mrs. Mee 詳細不明
3. Pasumalai Seminary インド南部タミル・ナードゥ州マドゥライ県パスマライにアメリカン・ボードによって開校された神学校

〈クラーク書簡 C-16〉【阪上敦子 訳】

1892年12月12日

拝啓 デントン様

幾分か体調や体力が戻って北海道から帰られたということを偶然知りました。これはとても嬉しいことですが、私としては、全快されたというような、もっと心強い報告を聞きたかったのですが。これから、お心にある多くの希望や計画を果たすためには、一時帰国をされずに、伝道活動に必要な万全の健康と体力の回復ができるか私には疑問です。あなたがカリフォルニアに戻られて友人を訪ねたりする許可はいつでも最良と思われるときにいたしますので、ご安心ください。いや実のところ、ご存知のように、折に触れて、あなたが長期間アメリカに滞在して貰えるよう勧めてきました。あなたには是非とも健康を取り戻して、日本のために新たな気力や希望へ向かって邁進して頂きたいのです。日本でこれまで、あなたはボードが評価し、広く注目も集める仕事をされて来られました。さらに豊かな経験を積んで友人たちとの交流を広げられると、当地の人全てとよい関係を築かれるだろうと確信しています。

次に、あなたが特に喜ばれることでしょうか、お仕事への寄付金について数件ご報告いたします。まず、ウーマンズ・ボードのニュー・ハンブシャー

支部からのもので、あなたに託されているバイブル・ウーマン¹ 1人への40ドルです。また、同じ支部から、面倒をみておられる生徒1人への15ドルもあります。どうやらあなたのお幸せを気にかけているよい友人たちがその支部にはおられるようです。ひよっとすると、マンチェスターのペティーさん²から話しを聞かれたのかもしれませんが。カリフォルニア州ペリス在住のD. G. ミッチェル夫人からの、あなたが世話をしておられる生徒1人への20ドルもご報告します。これはたぶんあなたの昔の同窓生からのものでしょう。

あなたは、このお金を生徒たちに過度に期待させ過ぎないように、賢く上手に使うことがお出来になると信じています。女性宣教師の皆さんは何が何でも女生徒たちを助けてあげねばと考えておられるのではないのでしょうか。ですから、宣教師のひとりが生徒を助けると、他の宣教師たちも同じように寄付金を受け取って分配できなければ、不利な立場になるでしょう。そのような事態にならないようにするには、ある宣教師が別の宣教師の名誉を傷つけたり評判を落とすことがないように、お互いによく理解し合うことができたらいのですが。あなたの最大の自制心のひとつは、援助に値する若い女性が教育を受けたいと必死で求めているのに対して、あなたの心が「イエス」と首を縦に振りたいのに、あえて「ノー」と横に振ることでしょう³。

最大の寄付金は、ニュー・ハンプシャー州ポーツマス在住のルシンダ・ヒルさんから京都の女学校への100ドルです。彼女はあなた気付でその寄付金を送っておられます。ミッションが依頼した女学校へのこの金額の援助が、あなたのご友人からあなたの手を通して調達されるのですから、きっとあなたには特別な喜びでしょう。これは「愛のわざ」⁴であり、あなたには特に有難いものでしょうし、学校にとっても同じように価値あるものです。今は他の分野で多く減額せざるを得ないのですから、これらのお金が次々に特別寄付金として入って来るのは、私にとっても大変有難いです。

あなたのお幸せを心よりお祈り申し上げます。そして自分を殺してまで他人に優しいあなたには、ご自身にもそうであってほしいですし、ご自分の健

康と体力にも注意されるようお願いいたします。

敬具

N. G. クラーク

1. Bible woman 一定の訓練を受けて、外国人女性宣教師と一緒に伝道する日本人女性のこと。
2. Pettee, James Horace (1851-1920) のことか。アメリカン・ボード宣教師。ニュー・ハンプシャー州マンチェスター生まれ。1878年来日し、岡山地方で37年間伝道に尽力、社会事業なども後援した。その後、東京でも活動し、1918年に帰国。
3. デントン宛にと次々と送られてくる寄付金の取次をしながら、クラークには、他の宣教師の立場も気遣われたのであろう。デントンには辛いことかもしれないが、生徒に対する援助は慎重に行うようにとアドバイスしている。
4. 原文では ‘a labor of love’ とある。テサロニケの信徒への手紙一 1章3節
 “Remembering without ceasing your work of faith, and **labour of love**, and patience of hope in our Lord Jesus Christ, in the sight of God and our Father.” (KJV) 参照。口語訳聖書では「愛の労苦」と訳されている。

〈クラーク書簡 C-17〉【小林弘美 訳】

1893年 1月17日

拝啓 デントン様

以前サンフランシスコにおられたフェイさん¹と、あなたのことで楽しくお話し合いをし、外国の地での、あなたのお働きは折り紙つきの成功例だとお伝えできて嬉しく思いました。最近あなたの健康に関して何もお聞きしていませんが、どんどん快くなられ、出来る範囲内で、公正かつ十分に努力が報いられるように、あまりご無理をされないようにと願っています。誰も限度を超えて働くことは要求されません。しなければならないことと出来ることとは調和がとれており、召命にどんなに心が熱くなっても、自分の体に注意を払うこともまた考慮されればなりません。ともかく、一言二言で良いので、現在の状況の中であなたが健康でお幸せであることが分かるようなことをお聞かせ願いたいのです。

カリフォルニア州レッドランドの会衆派教会の日曜学校から、お世話をしておられる生徒の支援のために16ドルが送られてきている報告を一言付け加えておきます。その日曜学校へ一寸したお言葉でも書き送ってくださったら心から感謝され、もっと献金をしたいという気になって頂けるでしょう。

ウェインライト²さんやマイヤー³さんによろしくお伝えください。あなたご自身にもよろしく。

敬具

N. G. クラーク

1. Fay, Lucy 太平洋ウーマンズ・ボード第3代会長(在任1883-1889)。前出(439) 東部へ引っ越すための辞任であったので、この時期、東部でクラークと会ったのであろう。
2. Wainwright, Mary Ellen (1862-1918) 1887年来日。6月より同志社女学校で教え始める。来日前に専門の音楽教育を受けた最初の女性宣教師。前出(445)
3. マイヤー 前出(C-15)

〈クラーク書簡 C-18〉【杉野マリ子 訳】

1893年2月2日

拝啓 デントン様

今朝は嬉しい報告を致します。ニュー・ハンプシャー州のキーン市にある第一会衆派教会から、あなた気付で京都の女学校に計36.55ドルの献金がありました。その額に対しての使い途はきっとすぐに見つかるでしょう。そしてそれはあなたの働きを前に進めるのに役立つでしょう。

だいぶ前にあなたにお便りをしましたが、返事をする急ぎの用事がなくて、手紙は未だ机の上においたままではないか…と、失礼ながら想像しています。しかしながら、あなたの健康状態や体力についてももう少し知りたいのです。冬の間にお元気になられたでしょうか。元気よく勇気を持って、現在の人間関係に適応しておられますか。

以前何らかの摩擦があったことは知っています。でもあなた自身の健康がよくなって現在の環境にもなじみ、特にマイヤーさんとの関係もよくなって、現状に適切に上手く対処できておられるでしょうね。

このためには、私が今まで提案してきたように、仕事の役割分担を入念にすること程大事なものはありません。そうすれば、各自が何をすべきかが判断でき、可能なかぎり最良の方法で、それを自由裁量でやる事が出来るのです。目の前の仕事に対して、あなたもマイヤーさんも見事に適していると思います。個性の強い人同士はとかく一緒に上手く働けないもので、別々に働く方が双方幸せなのです。しかし、京都にはあなたとマイヤーさんのような強い女性二人が必要だと常々感じています。そして今は何カ月も、あなたたちが調和を保って働いていることを否定するような噂は一言も聞いていませんから、万事がうまく行っていると信じています。

祈りと希望を込めて。

敬具

N. G. クラーク

追伸：あなたに関する全てに関して、私が父親のように余計な心配をするのは不適切だと思わないでくださいね。C.

〈デントン書簡231〉【吉岡弘子】

[英文紹介]

この書簡は、1892年同志社女学校を卒業後、明治女学校高等科に進学した岡寿美（多分16・7歳）の書簡である。わざわざ訳をするよりも、当時の女学校生がどんな英文を書いたかを紹介する方が興味深いと考えた。

冒頭の季節の挨拶はいかにも日本人が書く手紙ではあるが、ともかく本意は十分に伝わるし、これだけ長文の英文書簡がすらすらと書けることは評価に値する。もちろん文法上の間違い（冠詞、単・複数、時制など）や未熟な言い回しは散見されるが、自分の属する教会のオルガン購入募金を必死で訴

える気持ちは十分に汲み取れるし、デントンが卒業後の生徒からも慕われ頼りにされている様子、また卒業生を通しての伝道に如何に熱心であったかも読み取ることができる。藤枝出身の岡寿美が卒業した1892年は、同志社女学校から初めて24名という2桁の卒業生が出たことなどから、文中で紹介される友人たちとも特別な一体感があったのだろう。

Feb 6th '93.

Fujieda,

Suruga.

My dear Miss Denton,

How are you? I am very well. Tho' the season is cold yet the plum-tree blossom & nightingale sing her quiet song foretelling the coming of pleasant spring.

I am quite busy with sewing lesson & house-work so I did not write you long-time, please pardon me for neglecting the letter. I thank you very much for the beautiful Christmas present. I heard from friends that the school have had such a nice Christmas eve. Our church also had pleasant meeting.

We have no organ so teacher of Shizuoka Jo Gakko¹ kindly send us organ — small one.

No one can play on it so I play'd. I thank God that I learned organ even a short time so I could help the church. Pastor & all christians are very earnest to buy one; it prices thirty & two yen but collections are 24 yen so there must be 8 yen yet. We gave as much as we can. We are very hard to get rest; if you give us even a little how glad & thankful we are. You know how organ is necessary in God's church.

Hymn is sing better & people will come to hear music & they

will also listen to the sermon so I wish very much to buy it.

I had a very pleasant time with Miss Yamada². She sent me a letter from Maebashi Jo Gakko³. I received your kind letter and beautiful cards from her!

I thank you specially for cards. The Sunday school children are very, very glad to have such big ones. They remember you so well. Those little cunning God's children give you much Yoroshiku, and we teachers also.

I will write letter some-times after to your friend who kindly send your card but now please give my thanks to her. Please tell me her name. Mr. Sasamoto⁴ said that you are very kind as to give him letter & beautiful cards. He has great authentic faculty so he is very skillful in many fine things specially to draw a picture so that he is very interest in foreign picture & cards. He is excellent student in Shizuoka Christian School⁵ and also he is skillful with managing a magic lantern. I think that lantern is another good one to tell about Christ life & many other God's words.

I will say again, if we will have organ in church, many unchristians will come to hear and perhaps through music they will repent. Please hear us O Miss Denton! God will reward for it. I have no courage to say this to Miss Meyer⁶ or other teachers because they did not come but you came & you saw the church and christians and your loving girl is there.

O please think out it & help us as much as you can. I have no word how thankful I am! I thank you thousand times for our boy.

He wrote me that he is very glad and he must study more hard

than before. His parents send you much Yoroshiku & they told me with tear that God answer their prayer.

I think you are quite proud to hear that he is best in the class; he was also best in this town: I am sure he will become the useful man to our country.

Please give my love to O Take San⁷, O Saku San⁸, O Chiki San⁹ & O Iku San¹⁰. Please give my special love to Koito San¹¹ for I did not write a letter last week.

Please tell me many things about school & girls. I wish you can give me a letter often.

Yours truly,
Sumi Oka¹²

My parents & sister give much regard to you and once again I ask you to think about organ & give us even a little.

1. 現在の静岡英和女学院。1887年にカナダ・メソヂスト婦人伝道会から受けていた1000ドルの寄付金を基に、静岡メソヂスト教会牧師平岩恒保らの協力により、私立静岡女学校として開校。91年から婦人伝道会の直接経営となった。
2. 明治25年本科卒の山田篤のこと。後に、共愛女学校主任教師となった。岡の同級生。
3. 前橋女学校とは、現共愛学園のこと。1888年に前橋英学校が廃校となった折に、前橋教会を核とする上毛の諸教会やアメリカン・ボードの支持を得て、旧英学校跡に前橋英和女学校として同年開校。新島襄も発起人の一人であったこともあり、同志社女学校生は卒業後、同校の教師になるものが多かった。
4. ささもと先生。教会員の一人であろうが、詳細不明。
5. 当時の Bible School のような学校であったのだろうか。現在、キリスト教の男子校はない。
6. マイヤー 前出 (C-15)
- 7~10. 全て明治25年本科卒の岡すみの同級生たち。田口多計 (または竹) 子、多田

咲子、浜田知亀子、平田郁子。

11. 土倉小糸は、1年下級の明治26年本科卒業。
12. 〔紹介〕欄参照

〈デントン書簡232〉【秋山恭子 訳】

日本 京都 同志社女学校

1893年3月7日

ミス・メアリー・フローレンス・デントン記す：

お送り下さった献金を有効に使う方法は山ほどありますので、それをどう使うかの選択をあなた様にお任せしたいぐらいです。教師1人分の給料にも使えますし、書物を買うためにも（私たちには書物や器具がとても必要です）、特別な伝道活動のため、一般經常会計に組み入れるにも、また、生徒の学費援助にも使えます。有益に用いる方法はいくつも挙げられますが、何よりも先ず使わせて頂きたいのは生徒の学費援助のためです。あなた方の代理人として、私たちがこの地で成そうとしている仕事を引き継いでくれる女性を教育すること、これ以上に立派な仕事はないと確信するからです。

『我らの時代』¹ 2月号に掲載された日本人女性の教育をテーマにした津田さん²の素晴らしい記事の一節に大変感銘を受けました。「私たちのために一人の〔日本人女性〕伝道者を育ててください。そうすれば、生涯をその仕事に懸ける終身宣教師を一人、派遣して下さることになります。なぜなら、その人の仕事は日本人同胞の中にあるのですから。」

私は出来るだけ市内の伝道活動をしたいと心がけていて、その目的で、貧弱な3つの日曜学校の世話をしています。その中の一つは私たちの校舎で開かれ、クリスチャンの生徒が先生をしています。この前の日曜日には100名の子どもが来ました。年長組にはパンチの入ったワーク・カードを使い、ブレイクスリー³の『キリストの生涯50課』⁴を学んでいます。女生徒は子どもたちのために、紙に小穴をあけて図柄を作り、日本語で聖句を書き込みます。

2回続けて日曜学校に来た子どもには、カードを1枚あげます。子どもたちの家庭は大変貧しく、身なりも粗末で汚れていて、頭には湿疹ができ、本当にかわいそうです。

ハリス理化学校の男子学生と連携して大学隣保館のようなものを開こうとしています。どうぞ日々のお祈りの中で私たちをお支えください。以前宣教師たちが祈りをとても強調していたのはなぜかと疑問に思っていましたが、今あなた方お一人お一人の祈りが必要であり、祈りに在ってのみ、この命がけの戦いに勝利することが望めるとわかりました。

1. *Our Day* (『我らの時代』) 米国論説文雑誌、最先端の話題に関する議論、論評が主な内容。1892年2月号誌上に掲載された「日本女性対象のアメリカの奨学金は、果たして、日本の女子高等教育促進に望ましい方法だろうか」という Mrs. Cook の投書に対して、2ヶ月前に、2度目の留学から帰国したばかりの津田梅が返答した文の一部。
2. 津田梅子 (1864~1929) のこと。1871年、満7歳で岩倉使節団と共に渡米し、初等・中等教育を修めた。1889年再渡米し、プリンマー大学を卒業して帰国後は、自分と同様の教育を日本女性にも願って、女子英学塾 (現津田塾大学) を創設。特に女子の英語教育の指導者となる。
3. Erastus Blakeslee (1838~1908) 元軍人。後に日曜学校やバイブルクラスのためのテキストを出版。
4. *The Life of Christ: In Fifty Lessons* (『キリストの生涯50課』) のこと。Blakeslee が1891年に Boston の Bible Study Publishing Company から出版した書物で、164ページからなる。

〈クラーク書簡 C-19〉【秋山恭子 訳】

1893年5月12日

拝啓 デントン様

今朝お手紙を差し上げる一番の理由は、カリフォルニア州レッドランドにある第一会衆派教会の日曜学校から特別献金として総額16ドルを受け取ったことをお伝えするためです。

あなたのお身体の具合や楽しい出来事などお知らせください。

敬具

N. G. クラーク

〈クラーク書簡 C-20〉【柿本真代 訳】

1893年10月17日

拝啓 デントン様

嬉しい報告があります。ワシントン州スポケーンの「キリスト教少年共励会」¹から、あなたが世話をしているタコモトさん²への教育費として特別献金13ドルを頂戴しました。年次総会³の後で大変忙しくしております。そうでなかったら、もっと長く書きたいのですが。

敬具

N. G. クラーク

1. Y.P.S.C.E. Young People's Society of Christian Endeavor (キリスト教少年共励会) のこと。原文では Y.P.S.C.H. とあるが、HはEのミスタイプと思われる。
2. 高本さんか？詳細不明。
3. この年次総会で、クラークは1893年の年度末を以て引退することを表明した。

〈デントン書簡233〉【樫本尚美 訳】

日本 京都

1894年1月17日

拝啓、フェイ¹様

頂戴したお手紙には大変びっくりし、また、嬉しく存じました。とても感謝しております。これまでもしばしば、あなた様がご自分のためにも日本をお訪ね下さり、ここでの仕事を見てくださることを何度も望んできました。今、日本では、大変多くの方が〔公〕教育を受けていますので、その教育熱に触れるためにも、私たちに会いに来てくださることを期待しております。

一見されればきっと、全てのことに對して大変違った感情をお持ちになるでしょう。現在日本人指導者の間には、社会的な動揺が広まっており、いつまでここに留まって一緒に働くことが許されるだろうかとの不安を私たちも皆感じています。ということで、私はますます確信するのですが、言語の習得に力を使う代わりに、直接伝道の仕事に主力を用いてきたことが賢明だったのです。通訳者を通して働くことで、失うものも多いのですが、日本語を使つての仕事の準備のためには、実に多くの時間や労力を使わなければなりません。ですから、今までの時間と労力の使い方は最も有利な方法だったと思います。

女学校の生徒数は辛うじて現状を維持していますし、宗教的状況は、この1、2ヶ月で充分改善されていると思います。しかし、社会的動揺が広まり、礼拝中にその話を聞いたり、日本の新聞で読んだりすると、女生徒の間でも動揺が感じられたとしても不思議ではありません。

同志社女学校の卒業生にはプリンマー・カレッジで2年目を迎える女学生が1人います。土倉まささん²です。彼女はお父上にお金を出してもらって留学しているのですが、よく勉強しています。

今日、素晴らしい手紙がまさから来ました。私にとって唯一の心配事は、時がどんどん経っていくことです。彼女は私が思っていた以上に俗世間の人々と過ごしているようですが、それによって彼女の信仰が損なわれることはないようです。まさは私の身内同然の娘なのです。看病婦学校で1年間一緒に過ごしました。彼女のことは好きなだけでなく、尊敬もしています。もう一人は、ジャーマンタウンのステイーヴンス夫人の塾にいる松田道さん³です。道は「フィラデルフィア奨学金」⁴の支援を一部受けていますが、大変倍率の高い試験に合格したのです。(何という名誉でしょう！)

ジュエットさん⁵は、道の奨学金の不足を補うために私が募金活動をしたことを不愉快だとあなた様宛の手紙に書かれたかも知れませんね。万一あなた様がフィラデルフィア周辺に行かれるようなことがあったら、この2人の

若い女性にきっと会ってくださいますよね。そして、お道さんのような女生徒が、日本では長い間許されていなかった仕事に就く準備が完全に整えられたことを私がどれほど喜んでいるか、あなた様なら十分に分かって頂けると確信しています。お道さんには、日本の女性のための「新島〔襄〕」になることを私は強く望んでいるのです。

会衆派の女性の誰かがこの女生徒2人の面倒をみてくれることができればと願いますが、私には、2人の面倒を任せる友だちがフィラデルフィアには一人もいません。改めて、楽しいあなた様からのお手紙に感謝し、いつか日本でお目に掛かれることを期待しております。

敬具

メアリー・フロレンス・デントン

1. フェイ 前出 (C-17)
2. 土倉政 前出 [140]
3. 松田道 (道子) (1868-1956) 同志社女学校英書科に1884-86年、高等科に1892年-93年在学。京都府峰山の裕福な呉服商の家に生まれ、小学校卒業後「京都女学校及女紅場」に入学するが、卒業後「英語の勉強がしたくて」同志社女学校とフェリス和英女学校で勉強を続ける。折しも、津田梅子主唱「日本婦人米国奨学金」(ジャパニーズ・スカラーシップ)の募集があり、第1号受給者に選ばれて1893-99年渡米、プリンマー大学で学位を取得した。帰国後、同志社女学校初の女性校長(1922-30)、女専校長(1931-33)のほか、理事・同窓会長・寮務主事などを歴任した。
4. 「フィラデルフィア奨学金」ジャパニーズ・スカラーシップのこと。日本最初の、女性のための留学制度。この制度は、津田梅子とアメリカのフィラデルフィア郊外に住む大富豪の実業家 Wistar Morris 夫人の Mary H. Morris によって1893年に始められた(1920年からは、Mary の孫娘 Marguerite W. MacCoy が委員長を引き継いだ)。原則として、渡米中全期間の授業料と寮費全額および小遣い(本代などの1部)を委員会が支給し、渡航費は自己負担だった。1893年から1976年まで、合計25人の女性奨学生が恩恵を受けた。
5. ジュエット前出 (C-11)